

無声の詩—2—有声の絵



唐朝の末、神仙といわれた呂洞賓が、その仙力によって竜にのり、虚空を疾駆したという伝説を題材に描いたものである。

左手の壺中から生じた竜が空に舞い上って成長し、呂洞賓をのせて神妙に役目を果すまでの一連の動きが同一画面の中に巧みに構図されている。

ぬりのこしの白と、力強い墨線、湿潤な暗雲とを対比させて、あたたかも暗黒の中に一闪した稲妻によって映し出された神仙の姿を、かい間見のような印象を与え、主題の怪奇さを極めて感覚的に表現している。竜のはりのある手足、天に巻き上る波頭など、気魄にみちた動的な筆致には他の追随を許さないものがある。

ここで想起するのは雪村の画論「説門弟資」の冒頭の一句「夫画道は諒に仙術にて」という文章であり「竜の雲を起し虎の風を促す」如く自在に表現されたこの神仙呂洞賓の姿に、奇才雪村の面影を認めることが出来る。

重要文化財・呂洞賓図

雪村（1504—1589）筆 室町時代

紙本墨画 118.3×59.5cm

季刊 美のたより No.2

昭和42年 7月1日

発行 大和文華館